# 世紀末通りの人びと

立松和平

# 世紀末通りびと

立松和平

毎日新聞社

立松　和平
（たてまつ わへい）

1947年，宇都宮生まれ。早大政経学部卒。第1回早稲田文学新人賞（『自転車』），第2回野間文芸新人賞（『遠雷』）。
〔主著書〕『たまには休息も必要だ』（集英社），『歓喜の市』（集英社），『熱帯雨林』（新潮社），『魂へのデッドヒート』（文藝春秋），『春雷』（河出書房新社），『性的黙示録』（トレヴィル）他多数。

世紀末通りの人びと

定価1500円

1986年9月10日　第1刷
1986年11月30日　第4刷

著者　立松和平
編集人　川合多喜夫
発行人　吉沢孝治
発行所　毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ッ橋
〒530 大阪市北区堂島
〒802 北九州市小倉北区紺屋町
〒450 名古屋市中村区名駅

印刷／中央精版
製本／佐久間製本

© Wahei Tatematsu, *Printed in Japan 1986*

ISBN4-620-30537-5

# 目

# 次

明晰の時代——スケバン女優と呼ばれた女 9
人は朝に死ぬ——病み疲れた産業戦士 17
夢は夜ひらく——女装クラブで遊ぶ 25
魂の共和国——純粋右翼と田舎右翼 33
野垂死考——死者たちのTOKYO 40
殺意のロープ——オートバイ少年の死 46
遊びのコンビニエンス・ストア——新宿歌舞伎町のトポロジー 52
野の教師——若者たちの駆け込み寺 60
天使が通る——プログラマーの集団見合い 73
現代の苦行僧——黙殺されたボクサー 80
醤油みたいな海——たこ八郎追悼 88
少女と兵士の夏——沖縄米軍基地界隈 94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

長男の嫁——盆の帰省ラッシュ考　103
ブラディー・マリー——混血ロックシンガー　110
生と死の境界——沖縄ロックの青春　117
極彩色の夢——花園神社の小屋掛け芝居　124
人の海を走る——香港—北京モーターラリー　130
足の裏考現学——土踏まずが退化した　144
近くて遠い国境——根室・北洋船の厳海　151
のどかな秋の午後——女子大学園祭ぶらぶら歩き　159
時代は走る走る——東京モーターショー　166
愚行の氾濫——舞踏かBUTOHか　173
殺人シミュレーション——ホラービデオの現場　181
浪人は燃える——全国予備校縦断コンサート　188

片隅の感覚——ロマン・ポルノ本日モ晴朗ナリ 195
北の漁師——日本最北端に立つ 203
日溜りのタイムトラベル——下谷七福神めぐり 210
予告された殺人の記録——山谷、仁義なき戦い 218
フリーゾーン計画——日本最西端に立つ 233
万物は地下にある——ハイテク発進基地としての採石場跡 239
ストリップ街道をゆく——裸体美の変遷 245
流氷の表と裏と——冬の知床は美しい 251
リゾートって何——冬の沖縄万座ビーチ 257
地下の方舟——カプセル型核シェルター 263
無残の美——短歌絶叫コンサート 270
両性具有の午後——異端の精神分析学者との対話 277

究極の酒盛り——厳冬の礼文島紀行　285
子供たちの勇気——殴り合いのコミュニケーション　292
永遠のトム・ソーヤー——丸木小屋をつくる男たち　298
魔のトンネル——東京の恐さ　304
淋しい笑顔——東京ディズニーランド　311
生と死の光景——臓器は金になるか　318
後　記

装幀　荒川じんぺい
カバー写真　岩宮武二
本文写真　著者

# 世紀末通りの人びと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# ✝明晰の時代——スケバン女優と呼ばれた女

東京を中心に日本中の思いついた場所を、上澄み液から底に澱んだ汚泥まで、流れのままに浮きつ沈みつして漂う。普段でも路地から路地へとうろつきまわり、人生は細部にこそ宿ると一人ごちる日毎夜毎ではある。だがこれから当分、毎週毎週六千の文字を書くことをノルマに、この身を突き転ばし引っぱり上げ、時には野良犬のように水をかけられたりしながら、路上をのたうちまわらねばならないのだ。

さてどうしようかと途方にくれて歩きまわっているうちに、雨の原宿にやってきたのだった。表参道のハンバーガーショップ『ウェンディーズ』の角を折れ、右に曲がり左にいってまた戻り、めざす店『パンクショップ・デッドエンド』を二階に見つけた。階段の昇り口の傘立てに傘をいれようとすると、一階のヤングファッションのブティックから店主らしい男がでてきて、これはうちのだといわれたのだった。傘を持って階段を昇ると、薄暗い店内に一人の少女がいた。

「あたしもネレてきたよね。何か聞かれると、別にいいじゃーん、関係ねえだろう、しか口きかなかったんだから」

女優高田奈美江はそういって笑った。二年前の十六歳の時、自分の体験に基づいた映画「夜をぶっとばせ」(監督曽根中生)に自ら主演し、以後〝スケバン女優〟といわれている。通っていた中学校からは卒業証書やるから登校しないでくれと頼まれたのだそうだ。髪を金色に染めた彼女は、人生を一通りやってしまったというような疲れた表情を時折つくり、十八歳という年齢を聞いて私は驚いたほどだった。BGMにパンクロックが鳴り響いていた。私は彼女の印象を素直にいった。

「静かだね」

「あたし、この年で身の上相談やってんだぜ。ああいうことして、映画でただけなのに、静岡から電話してきて泣くんだぜ。その子、先生に相談にいったら、相談室で犯されたんだって。親にも友達にもいえねえだろう。キタネエよ。あたし

みたいの狙わないじゃん。弱いと何処までも突っ込まれんだから」
「そんな先生がいるんか」
「先生ってのは、大学でたそこそこのやつらだろう。試験受かって、自分は偉いんだって気になって、へんにつくってるんだ。学校では生徒はいうことをきくほう、先生はきかせるほうって、どっちも役割やってんだ。そりゃいい先生もいたよ。学校であたしが突っ込んでいけば、その先生は他の先生に突っ込まれんだから。突っ込まないほうがいいって思ったわけ。先生だからキライ。どんなにいい人でも。向こうも不良だからキライなんだろう。学校以外ならつきあえるかもしんないけどさ。メルヘンチックなあたしだけど、結構個性が強いんだ。自分はこうなんだってはっきりいうから。不良って、アイドル化されるじゃん。自分がやれないことを、奈美江ちゃんがやってくれる。不良も役割やってんだよね」
淡々としたいい方だが、言葉は後から後からあふれてきた。頭のいい子だ。私も言葉を選ばなければならない。
「役割かあ。無理に役割やらせられることがあるんだよな。今、オレ、ルポライターやってるもんな」
「本当は人間ってさ、悪い人はいないと思うわけ。あの子は手クセが悪いけど、いい人間だよね。そういったらみんないい人間になっちゃうよね」
「それでも人間関係はなかなかうまくいかないんだよなあ」
「誰だってやさしくしてやればなびくんだよ。親は自分の場所からでてこないでさ、遠くのほうから、戻ってらっしゃーいって、呼んでるだけなんだ。誰がいくかよ。そこにいく道もわかんねえのに」
「親はどうだったの」
「あたしは恵まれてたよ。何処に逃げても、お父さんが連れ戻しにきたんだ。あたし、シンナー三年間やったけど、家出はしなかったよ。無断外泊。遊びはしたさ。売春する子も中にはいたけど、あたし、金もらっておじさんとやるの、気持悪い」
「女は売春、男はヤクザって。古いな」
「あたしの知ってる暴走族でさ、警察に追いつめられると、いってきまーすって、自衛隊にはいっちゃうんだ。警察も手出しできないらしいよ」
「あははは」
「ふふふふ」
彼女のアイスコーヒーの氷は溶け、私のコーヒーは冷めていた。長椅子が二つ向き合いになっている十人は掛けられる大テーブルと、私たちがいる六人掛けのテーブルがあるきりの、大衆食堂風の店だ。ラフォーレ原宿から辻ひとつへだてた原宿のほぼ中心部にある二階の店に、一九六〇年代の空気

が色濃く流れている。同じものが少しずつズレながらくりかえされていく。

やきそば　四〇〇円
酢ブタ定食　五五〇円
串カツ定食　五五〇円
やきとりドン　四〇〇円
テンプラ定食　四〇〇円

店のメニューである。表層はズレて変わっていっても、食べるものはまるで変わらない。パンク風に髪を染めた若い男が二人、大テーブルに向きあって酢ブタ定食を食べていた。階段を昇る足音がして、店にセーラー服の女子中学生が二人はいってきた。制服でもいいですかと女子中学生が尋ねると、いいわよーと奥から女の声が返った。若い男が詰めて席をあける。ミキちゃんと呼ばれる女がカウンターの中からでてきて注文を聞く。奈美江はミキちゃんの仕事を手伝っているのだ。女子中学生たちは緊張した様子でストローでアイスコーヒーを飲んでいるだけで、連れとも、隣りあわせた男とも言葉を交わさない。BGMでジーンジーンと響くギターにあわせて男が絶叫している。歌詞はほとんど聴き取れない。

ベイビー
カモン　ウィズ　アス
ロック　ロック　ロック

パンクファッションの店が食堂と併設されていた。鉄のトゲが植えてあるパワーリストや、ブーツや、スパイクグローブがたくさんならべてあった。オーストラリア映画「マッドマックス」の暴走族や、アメリカ映画「ウォーリアーズ」のニューヨークの不良が身に着けていた武器だ。奈美江の左腕にも控え目な鉄のトゲのパワーリストが絡んでいた。こんなので殴られたら顔はギザギザになる。

「あのさ、日本の暴走族は日の丸持ったりして、どうして特攻隊の格好するんだろう」

「それが格好いいと思ってんじゃないの」

「アメリカとかヨーロッパは、暴走族はパンクファッションだよな」

「日本じゃ、暴走族がパンクやるんじゃないんだよ。パンクやってるのは普通の子。ツッパリやりきれないんだ」

店の内装はゴミ捨てに使う黒いポリ袋を天井と壁に一面に貼りつけただけだ。ドアが開くたび風が吹き込み、ポリ袋がてらてらと輝く。金髪にした小柄な少女が二人やってきて、一言も口をきかぬままTシャツを買ってでていった。

セックス・ピストルズ。パンクロックの王者。彼らが社会不満を過激にぶつけながら政治性も濃密に登場した一九七〇年代中頃、熱狂したロンドンの聴衆は若い失業者だった。ロックの原点回帰としてあれはあれで新鮮だったのだ。私はテーブルの上にあるミニコミ誌『修羅』のページをぱらぱらと繰った。そこに「COBRA 単独インタビュー」として、ヨースコー氏が大いに語っていた。

政治性を持っているバンド？ 日本で？ そういうバンドは一つもないと思うで。そんなん今からは全部省いていかなあかんわ。向こうは客に関しても失業者とかあるやろし、それについて歌ってるゆうのはわかるねんけどな。日本の奴なんか金は持っとるわ、仕事なんかバイトしようと思たらバイト先はあるわ……幸せやねんから別にそれでええと思うねん。戦争怖い、戦争怖い言うて無理やり、若い奴にたたき込む必要ないやん。そんな事してみ？ ほんまに不安になるで。みんな変に頭を使い出して、年寄りやったらええわいや、新聞読んで文句言う位やわ、十七、八の奴やってみ、知恵使い出して暴動とかな、若いから何でもできるわ。恐いで……そっちの方が……。だから、俺はそういうのは間違いやと思う、不安な気持にさすのは。まあ若い頃からそういう現実を知るいう事はいい事やけどな……。だからそれについてもし聞かれたら、うだうだ喋った方がカッコええ思ってんのが今のPUNXやと思うねん。それはまあ一番無駄な世界や思う。

明晰なのである。「明晰の時代」と名付けたいほどだ。その明晰さでほとんどの人が政治的だ。何をすればいいのかではなく、何をしなければいいのかをみんなが知っている。

私の前にも髪を金色に染めた明晰きわまりない厚化粧の少女がいる。奈美江は時々タバコをくわえては、伏目がちに、だが澱みのない明晰さで語りつづけた。

「学校って、ふれあいとか、共同生活とかって、押しつけるじゃん。勉強するんなら、勉強だけやって、家のこと持ち込まないほうがいいよ。親がどうしたとか、兄弟がこうしたとか。PTAなんて最低だぜ。オバさん連中のミエはり合戦だろ。きらびやかに飾ったオバさんの列だろ。あんなのないほうがいいに決まってる」

「大人がミエはるのは、自信ないからなんだ。みんなビクビクしてる」

「でもこんな平和な国ないよ。この前反戦したんだ。ただ戦争キライだから、署名したんだよ。しばらくしたら選挙の人が挨拶にきたんだぜ。あたし、選挙権もないのに。あたしな

んかが反戦したって、政治はビクともしないよね。馬鹿なことやってる大人が多いから、きっと戦争起こると思うよ。不自然だよ、こういうの。核があってさ、反戦してて、ガキが好きなことやってる。脳の足りねえガキが頭に立ったら、どうしようもねえよ。親の七光りが通じんのは日本ぐらいじゃんかよ。ちょっと我慢すれば仕事だってありつけるしさ。波に流されれば生きていける。とっても素敵な見せかけの平和だよお」

「考えてんだなあ」

「考えてないように見えた?」

「うん、見えた」

「ふふふふ」

「あはは」

「あたし、詩書いたんだ。妹のバンドに曲つけてやろうと思って。やっぱ、オリジナルがないと淋しいよ。えーと、えーと、昨日寝る前につくったんで忘れちったよ」

自分で死ねないのなら
殺してやろう　簡単なこと
お前なんか
さあ幸せになろう
もう少しだ
ああ無に戻るんだ
死にたくなるほど悲しいことがある
自分が死ぬくらいなら
いっそそいつを殺しちまえよ
YES か NO かはっきりしない
日本的ないいわけだらけ

奈美江は歌手になりたいといった。エイトビートのリズムに乗って自作の詩を歌っている奈美江の姿を彷彿とさせながら、私はデッドエンドの木の階段を降りた。

今は政治の時代なのかもしれない。沈黙することで政治的たろうとすることしかできないのだが。いくら声高に叫んだところで、ロックで暴動が起こったためしはない。アジテーションも、激しいエイトビートも、不安や不満という過剰なエネルギーをコンサートホールで蕩尽するだけだ。それは爆発でも何でもなく、ただ使い尽くすだけなのだ。

してみると、耐えて、沈黙し、内部に爆薬をためていく人ほど、この時代には政治的なのだ。たとえそれが心身症や仮面うつ病としてしか現れないのだとしても、彼らが産業の中枢にいるぶんだけ、世の中にダメージを深く与える。スケバン女優も、パンクロックのヨースコー氏も、世の中の周縁にいて、若い余剰なエネルギーを蕩尽してきたことが、社会に



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.